

## ホクレン農業協同組合連合会 滝川種苗生産センター

ホクレン農業協同組合連合会 種苗園芸部  
滝川種苗生産センター業務課長 向 正行

### 1. 地理・気象

当センターの位置する滝川市は、北海道のほぼ中央石狩平野の北に位置し、石狩川・空知川にはさまれた緩やかな丘陵地帯にあります。森林や農地などの緑に囲まれ、札幌市と旭川市の間地でもあり、古くから交通の要所として栄えてきました。

内陸型の気候で、年間の平均気温は約7度、月平均気温の年格差は30度ほどあり、四季の変化がはっきりしています。特に夏は穏やかな気候に恵まれますが、冬は積雪が1 mを越える北海道でも有数の豪雪地帯です。このため、広大な北海道に適応する優良品種の原採種事業には適しているとされ、北海道立中央農業試験場の遺伝資源部も同じ滝川市にあります。

### 2. 設立の経緯

種子法・種苗法の改正に伴い、種子の生産・流通分野への民間参入の道が開かれたことから、北海道は平成2年に原原種生産業務を民間に委託（主要農作物：水稻・麦類・大豆類）・移管（主要畑作物：雑豆類・園芸作物・そば）する方針を決定し関係機関に提案いたしました。ホクレンはこの提案を受け、生産者・会員に対し優良種子の安定生産・供給を図ることが最大の使命と考え、北海道より同事業について全面的に継承することに決定しました。ホクレンは原原種生産用地を滝川市に求め、平成3年～平成4年にかけて原原種生産施設を建設しました。この後、平成4年からの試行栽培を経ながら、北海道からの原原種生産業務の委託・移管が、平成5年～平成7年に各品目（雑豆類・園芸作物～移管、水稻・麦類・大豆類～委託）毎に実施されました。

### 3. 原原種生産事業の概要

#### (1) 土づくり

当センターの原原種生産圃場は、かつては放牧地として利用されていた土地であり、粘土質が強く極めて透水性に乏しく、特に物理性に劣っていました。そのため暗渠・明渠排水設備の設置や、緑肥作物の鋤き込みや堆肥の投入など、土壌改良を進め4年輪作体系(麦-豆-緑肥-緑肥)を採って良質種子の安定生産を図っています。

#### (2) 作付け概要

原原種生産圃場は合計294,322m<sup>2</sup>（水田18,717m<sup>2</sup>・畑作275,605m<sup>2</sup>）に対し、平成20年度の原原種栽培は、水稻700m<sup>2</sup>・麦類5,250m<sup>2</sup>・大豆類900m<sup>2</sup>・雑豆類1,450m<sup>2</sup>・園芸作物70m<sup>2</sup>、合計8,400m<sup>2</sup>となっております。尚、雑豆類の内訳は



原原種生産状況 菜豆（福粒中長）



原原種生産状況 高級菜豆（福虎豆）



原原種生産状況 えん豆（北海赤花）

小豆類600m<sup>2</sup>・いんげん類850m<sup>2</sup>となっております。

各品目の作付け割合は、毎年ほぼ同様の割合となっておりますが、品種別の作付け面積については、原原種の需要動向と備蓄量を勘案し北海道種子協議会において決定されます。

### （3）栽培管理

原原種の生産に供する種子は、3作に1作（3年に1度）の割合で、北海道が配布する育種家種子（基本系統）を用い、後の2作は、原原種を種子として再生産行っています。原原種の栽培管理は、作物毎に定められた「原原種栽培管理基準」に準拠して生産を行い、北海道知事の指名を受けた審査員による「圃場審査」および「生産物審査」に合格することとされており。例えば雑豆類については、病虫害株・異型株の抜き取りを確実に実行するため、8～10株/m<sup>2</sup>の一本立で栽培管理します。品目・品種ごとに開花期・収穫期が異なるため、数回に分けて「圃場審査」を受けます。収穫・調製は、異品種混入の防止に配慮しながら行い、風選・粒形選別機に加え比重選別を行った後、手よりで仕上げます。一度仕上げた生産物についても規格・発芽率について懸念があれば、再選別を行うことも稀な事ではありません。

### （4）配布・備蓄

当センターで生産された原原種は、「生産物審査」に合格した後、配布・備蓄に供されます。主要農作物（水稻・麦類・大豆類）については、北海道が行いますが、主要畑作物（雑豆類・園芸作物・そば）については、移管先が行うこととされています。当センターでは、雑豆類原原種の備蓄のため、温度5℃・湿度45%の種子保管施設を保

有し、原種生産などに必要な原原種の配布と備蓄を行っています。

当センターは、毎年26～28品種程度の原原種生産を行っていますが、北海道優良品種は70品種を越えますので、多品種作付による雑交・コンタミ防止と原原種生産の効率化を図るべく数年分の種子をまとめて生産することで1年毎の作付品種数の削減を図っています（備蓄回転方式）。

特に雑豆類の原原種生産は、手より調製などによる生産コストが高いことから、平成11年より（財）日本豆類基金協会の支援を受けながら、生産・収穫調製・備蓄に関わる効率化を図るべく各種試験事業を行っています。

## 4. その他事業

当センターは、上記原原種生産事業の他、以下の3事業センターが併設された複合事業所となっており、繁忙期の異なる各事業の労働力配分を行い、作業員人件費の削減とともに通年の地元雇用に努めています。

### （1）「北のプラグ」セル成型苗生産センター

道内での野菜・花き生産の増加と農業者の苗購入需要に応えるため、平成3・4年に温室を4棟建設し、平成5年から野菜・花きのセル成型苗を生産しております。平成11年より接木苗の生産も開始し、「北のプラグ」のネーミングで親しまれています。

### （2）ゆり根原種センター

原原種からの一環体制で食用ゆり根「白銀」のリン片増殖を実施しています。リン片増殖は、2年球のリン片を培地に伏せ込み、一定の温度・水分管理によりリン片子球を生産するもので、生産したリン片子球は委託原種生産者に供給されるほか、平成17年からは、自前での原種生産を希望する農協へのリン片子球直接供給も開始しています。

### （3）水稻種子調製センター

昭和43年から全道7カ所の採種圃と種子センターで水稻種子を供給してまいりましたが、施設の老朽化に伴い平成8年10月、滝川に種子センターを統合新設いたしました。精選調製、種子検査を経て全道の一般栽培農家に良質種子を供給しております。